

Title	ストア哲学における言語理論と存在理解
Sub Title	The Notion of Being and its Linguistic Expression in Early Stoic Philosophy
Author	中川, 純男(NAKAGAWA, SUMIO)
Publisher	
Publication year	2009
Jtitle	科学研究費補助金研究成果報告書 (2008.)
JaLC DOI	
Abstract	ストア派はパトスすなわち激しい感情における身体的変化と魂における現象との厳密な対応を主張したと考えられる。このことが、ストア派について唯物論的との批判がなされる遠因となったのであろう。しかしながら、ストア派の意図は魂の現象を身体的変化に還元することではなく、あくまで両者の密接な対応を主張するものであり、このことについて初期ストア派のクリュシッポスがゼノンやクレアンテスと異なりパトスをロゴスの部分的働きに解消したと批判するガレノスの解釈は正しくない。
Notes	研究種目：基盤研究(C) 研究期間：2005～2008 課題番号：17520025 研究分野：人文学 科研費の分科・細目：哲学・哲学・倫理学
Genre	Research Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KAKEN_17520025seika

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

平成 21 年 5 月 25 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2005～2008

課題番号：17520025

研究課題名（和文） ストア哲学における言語理論と存在理解

研究課題名（英文） The Notion of Being and its Linguistic Expression in Early Stoic Philosophy

研究代表者

中川 純男（NAKAGAWA SUMIO）

慶應義塾大学・文学部・教授

研究者番号：60116168

研究成果の概要：

ストア派はパトスすなわち激しい感情における身体的変化と魂における現象との厳密な対応を主張したと考えられる。このことが、ストア派について唯物論的との批判がなされる遠因となったのであろう。しかしながら、ストア派の意図は魂の現象を身体的変化に還元することではなく、あくまで両者の密接な対応を主張するものであり、このことについて初期ストア派のクリュシッポスがゼノンやクレアンテスと異なりパトスをロゴス的部分の働きに解消したと批判するガレノスの解釈は正しくない。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2005年度	1,000,000	0	1,000,000
2006年度	1,000,000	0	1,000,000
2007年度	800,000	240,000	1,040,000
2008年度	700,000	210,000	910,000
年度			
総計	3,500,000	450,000	3,950,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学 ・ 哲学・倫理学

キーワード：初期ストア派、パトス、ガレノス、クリュシッポス

1. 研究開始当初の背景

従来、初期ストア派のなかに、とくに魂について、見解の相違があるとするガレノスの見解が無批判に受け入れられてきた。またストア哲学の独自性を強調するあまり、プラトン以来の哲学史的な文脈のなかにストア哲学を位置づけることは試みられることがなかった。しかし、初期ストア派についての資料はかぎられており、しかも従来用いられてきた資料はいわゆる学説誌と呼ばれるジャンルに含まれるものであって、思想の表層的理

解を紹介するにとどまっている。それゆえ、初期ストア哲学についてより哲学的な理解を追求しようとするなら、伝えられる証言を哲学的思想的な文脈のなかに位置づけることによって、それぞれの証言の意図するところを想定し、解釈しなければならない。本研究は、初期ストア派の思想がおかれるべき文脈を解明しつつ、思想そのものの理解を深めようとするものである。

2. 研究の目的

ストア派は、独自の言語理解にもとづいて、論理学、自然学、倫理学等の諸学を体系化した。本研究は、その中でも倫理学の領域において、ストア派の言語理論の実態と、その上に構築された倫理学説との関係を解明することを目的とした。ここでいう言語理論と倫理学説との関係とは、一例を挙げると次のようなものである。ストア派は、「存在するもの」を区分し、存在するものには善いもの、悪いもの、善悪いずれでもないものがあるという。この区分はプラトンにさかのぼる伝統的なものであるが、ストア派はそのうちの、善悪いずれでもないものをさらに「優先されるもの」「斥けられるもの」に区別し、学派外からは新たな用語を導入して無用の混乱を引き起こしたとプルタルコスらによって非難されている。善悪いずれでもないものとは、プラトンやアリストテレスによれば、善いものにも悪いものにもなりうるもの、善いことのために用いられるなら善いものとなり、悪いことのために用いられるなら悪いものとなるものである。ところがストア派は「善いものにも悪いものにもなりうるもの」が善いものである場合に、それを「善い」とは呼ばず、「優先されるもの」と呼んでおり、このことが無用な新語を導入したと非難されているのである。しかしながら、ストア派以前の「善悪いずれでもないもの」という概念と、ストア派のいう「優先されるもの」「斥けられるもの」という概念とは厳密に考えるなら同じではない。プラトンの言う「善悪いずれでもないもの」やアリストテレスの言う「それ自体で善いのではなく、それ自体で善いもののゆえに善いもの」は、いわば概念的な枠組みであって、事物の分類項目ではないのに対し、ストア派の言う「優先されるもの」「斥けられるもの」は、それぞれ特定の事物に一義的に適用されたと考えられるからである。ストア派は、「善いものにも悪いものにもなりうるもの」については、それを「善い」と呼ぶことを斥けるとともに、同一のものが善悪のような反対のあり方のいずれをも同時に持つことも否定しているのである。なぜか。それはストア派が、善も悪も何らかの物体の性質であると考えからである。もし物体の性質であるとするれば、一義的に「善い」ものと、選択によって「善い」と認められるものの善さとは同じではないと考えなければならないし、同一のものが互いに相容れない性質をもっていると考えすることもできない。それゆえストア派は、善悪いずれにもなりうるものについては、それを善あるいは悪と呼ぶことをせず、選択非選択の根拠として、善悪とは別の「選ばれうる」「斥けられうる」という性質を措定したのである。ス

トア派は、このように言語の指示するところは物体ないしその性質や運動であると考えた。ストア派の唯物論といわれるのはこのような考え方であるが、その特徴は物体についての理解にあるというより、言語の表示ないし指示についての理解にあるというべきである。

このように言語理論はストア派にとって、諸学の基礎となる理論であるが、このことはいまだ研究者によって十分には気づかれていない。それにはいくつかの理由が考えられる。第一に、ストア派は学問分野を区別し相互の関係についての理論化を行ったが、言語理論そのものはそれが一つの学問分野を構成するとは考えなかった。そのため、ストア派についての資料集は、言語理論を一つの分類項目として資料を収集していない。このように、ストア哲学の研究は、ストア派自身が設定したと考えられる学問分野の区分にしたがってなされるのが通例であるため、言語理論は研究の対象領域として十分に認知されていない。このことの帰結として、第二に、ストア派の言語理論についてはいまだ資料収集そのものが不十分であり、既知の資料の中にも未利用の証言がかなり多いと予想される。本研究は、ストア派の言語理論にかかわる資料の再構築を、まず倫理学の分野における言語理論の活用という視点から行った。

3. 研究の方法

ストア派の倫理学において、とりわけ言語理論との関係が密接であると思われる問題、存在の分類と行為の分類に注目し、これらの分類整理の前提となる言語理論を解明した。事象の分類は、言語現象である肯定否定と密接な関係にあるが、このことはストア派も強く意識していたと思われる。なぜなら、「～であるもの」「～でないもの」の二分法の他に、ストア派に特徴的な三分法、すなわち「～であるもの」「～でないもの」の他に「～であるもの」「～でないもの」を含めた分割法があるが、これは言語現象である肯定否定がそのまま事象に適用されないことを意識した分類であると考えられるからである。古代ギリシア哲学においては、しばしば肯定否定は「反対」と考えられ、事象として反対のものが、肯定否定と同じように中間を許容しないのではないかという問題は、関心をもって論じられた問題のひとつである。このような問題意識がストア派にも受け継がれていると考えられる。ストア派における事象分析の方法としての言語理論を解明するためには、従来注目されてこなかった資料、したがって既存の資料集に収められていない資料を閲読する必要があり、本研究においてはガレノス、プルタルコスの証言に注目し

た。

ガレノスやプルタルコス等、ストア派に批判的であるが、一定の哲学的な理解を背景にもつ資料を学説誌資料と比較しつつ、再評価することにより、初期ストア哲学の内在的理解を試みた。

4. 研究成果

現在、初期ストア派の資料としてもっともよく用いられるのは Arnim の断片集であるが、Arnim は資料を主題ごとに細分化して収録したため、もとの資料が有していた文脈は完全に無視されることになった。しかしながら、初期ストア派についての資料のかなりの部分は初期ストア派のテキストそのものではなく、何らかの間接資料に依拠していると考えられるから、資料の信憑性を確定するために、それぞれの資料がどのような文脈を有しているかを確認することが必要である。まず、「目的」の概念を中心に、初期ストア派の主たる資料であるディオゲネス・ラエルティオス、ストバイオス、キケロがどのような文脈のなかでストア派の倫理学を紹介しているかを、「目的」についての説明を中心に考察した。「目的」についてどのように説明するかは、ヘレニズム期の哲学にとって、学派を識別する指標ともいえる重要な論点であった。その結果、いずれの資料も、人間はロゴスの動物であるから、人間にとっての目的はロゴスの動物に固有の目的でなければならぬという論理において共通し、この論理を枠組みとして初期ストア派の倫理学説を紹介していることが明らかになった。

初期ストア派の倫理学において、言語理論との関係がとりわけ密接であると思われる問題、すなわち行為の分類の問題に注目し、これらの分類整理の前提となっている知見の解明を目指した。このことを考える上で重要なのは生の目的と行為の選択との関係をどのように捉えるかという問題である。この問題を最初に顕在化させたのはプラトンの『ゴルギアス』であると思われる。『ゴルギアス』のソクラテスは、存在するものを、善いもの、悪いもの、そのいずれでもないものに分け、目的となるのは善いものであり、目的のために選ばれるものは善いものでないものであって、善いものでないものは、それ自体としては善くも悪くもないが善い目的のために善いものとして選ばれると言う。プラトン自身は指摘していないが、ここで「善い」という概念が二通りに用いられていることが重要である。すなわち、目的となるものが善いものと言われるだけでなく、目的のために選ばれるものも善いと言われるからである。アリストテレスはこの区別を明確に概念化し、善に「それ自体として

善いもの」と「それ自体として善いもののゆえに善いもの」とを区別した。善に二通りの意味を区別することはアリストテレス以後、哲学各派に受けつがれた。用語の厳密な使用を意図するストア派は、この二通りの善を同じ名で「善いもの」呼ぶことを斥け、目的となるもののみを善と呼び、目的のために選ばれたものは「優先されるもの」と呼んだ。「他のものと比較したうえで選ばれたもの」という意味である。

初期ストア派において倫理学は魂論と密接に関係している。本研究ではパトス論を中心に初期ストア派の魂論の解明も目指した。パトス論は魂と身体との境界に生ずる問題であり、その起源はプラトンのいわゆる魂三部分説にさかのぼる。すなわち、魂には魂に固有な働きをするロゴス的部分の他に、身体と密接にかかわる欲望の部分があり、さらに両者の間であってロゴス的部分の味方をし欲望と戦う気概の部分が区別されるという説明である。このプラトンの魂論に、アリストテレスは反対する。アリストテレスはロゴス的ではない魂の働きをすべてパトスと呼び、非ロゴス的のみとした。そこでパトスは、身体に由来する働きなのか、それとも魂に固有の働きなのかという問題が生じたと考えられる。このような問題はすでにアリストテレスに認めることができ、新プラトン主義のプロティノスにまで受け継がれていると考えられる。このような哲学史的な文脈においてストア派の主張を検討するとき、ストア派はパトスにおける身体的変化と魂における現象との厳密な対応を主張したと考えられる。このことが、ストア派について唯物論的との批判がなされる遠因となったと考えられる。しかしながら、ストア派の意図は魂の現象を身体的変化に還元することではなく、あくまで両者の密接な対応を主張するものであり、このことについて初期ストア派のクリュシッポスがゼノンやクレアンテスと異なりパトスをロゴス的部分の働きに解消したと批判するガレノスの解釈は正しくないと考えられる。初期ストア派のパトス論についての主たる証言はガレノスの証言であるが、われわれはガレノスの証言から初期ストア派のパトス論を再現するにあたって、このようなガレノスの視点を考慮しなければならない。

5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 2 件)

中川純男 初期ストア派の倫理学における「自然本性」の概念、『ギリシャ哲学セミナー論集』4、2007年、pp.64-77 (査読有)

中川純男 認識の様態 - トマス認識論の基本原理『中世哲学研究』第24号、2005年、pp.1-19 (査読有)

[学会発表](計 2 件)

中川純男 魂のロゴス的部分、新プラトン主義協会、2008年9月6日、於 法政大学

中川純男 初期ストア派の倫理学における「自然本性」の概念、ギリシャ哲学セミナー、2006年9月12日、於 駒澤大学

[図書](計 4 件)

中川純男 「初期アカデメイア」、『哲学の歴史』1、中央公論新社、2008年、p.512-516.

中川純男 「アウグスティヌス」、『哲学の歴史』3、中央公論新社、2008年、pp.146-170.

NAKAGAWA, Sumio, *The Known is in the Knower according to the Mode of the Knower, Corners of the Mind: Classical Tradition, East and West*, Tokyo, 2007, pp.70-82

中川純男 『クリュシッポス他 初期ストア派断片集5』(山口義久と共著) 京都大学学術出版会、2006年、pp.388 担当 pp.66-162, 233-297, 315-331

6. 研究組織

(1)研究代表者

中川 純男 (NAKAGAWA SUMIO)
慶應義塾大学・文学部・教授
研究者番号：60116168

(2)研究分担者

(3)連携研究者